

MIMAZAWAGAWASAGAN

# 三間沢川左岸遺跡(I)

平安時代集落址の緊急発掘調査概報



松本市教育委員会

## はじめに

松本市和田西原の一帯は以前から土師器・須恵器・灰釉陶器等が散布しており周知の遺跡として知られていたが、昭和30年代に開田事業が行われ、遺跡はほとんど破壊されたものと考えられていた。その後、同地には松本市により盛空工業団地建設が計画され、昭和61年12月に工事開始に伴う土取りの際、多量の遺物とともにいくつかの竪穴住居址が確認された。このため松本市教育委員会では関係機関と協議し、まず試掘調査を行い、次いで緊急発掘調査を実施することとした。調査範囲は工業団地の調整池、処理場、沈砂池予定地で、先に土取りをした場所のうち約7500㎡である。

調査は昭和62年5月から7月にかけて行われ、以下に示す多くの成果が得られたわけであるが、一方、遺跡は更に西側へ広がっていることが判明したので、今後も調査を継続することとした。本書は今回の調査概要について報告するもので継続調査終了後に本報告を行いたい。

## 遺跡の立地・環境

本遺跡は松本市の西南、山形村に接する位置にあり、標高は約642mの緩く東北に傾斜する耕作地帯で、現況は水田である。遺跡はその名の示すように三間沢川左岸にある。三間沢川は山形村西方の清水寺下辺より発して、村内東方で唐沢川と合流し、松本市神林川西で鋸川と合する。通常は水の少ない川であるが、降雨時には山形村の水を一つに集めて流下するため、河床を掘下げ、川幅10mあまりに対して深さは3~4mと深い。三間沢川・唐沢川等の小河川は梓川・鋸川の扇状地を浸食し、各所に小規模な河岸段丘をつくっている。土壌は表土(耕作土)は黒褐色の粒子の細かい土で、春先には塵埃となって巻き上がる光景がよく見られる。第2層は東鞍岳・御岳などの噴火によるローム層であるが、場所によってはローム層中に小礫層が含まれるものもある。ローム層は厚く数メートルに及ぶ。

周辺の遺跡については、西側の山形村北西に縄文前期、弥生後期の唐沢遺跡があり、その北側の北唐沢遺跡では縄文中期土器片が多出している。それを東に下ると神明遺跡があり、縄文前期の石製品が出ている。更に東に下ると縄文中期を主とする三夜塚遺跡がある。三夜塚遺跡は旧唐沢川の窪地の南北両縁にあり、縄文早・中・後期、弥生後期、奈良・平安時代と幅広い時代の遺物が出土している。この三夜塚遺跡の近くには、北に波田町に続く下原、南に堀之内・北竹原、東に野尻の各遺跡があり、下原・野尻の両遺跡からは奈良・平安時代の遺物が採集されている。本遺跡を経て東へ行くと、和田に入って中野尻・下野尻遺跡があり、これらは本遺跡の範囲に続くものである。他に太子堂からは石器が採集されている。三間沢川を渡ってすぐの右岸には縄文、奈良・平安時代の三間沢川右岸遺跡があり、更に南の松本市神林と山形村の境にあたる鏡窪遺跡からは弥生中期と平安時代の遺物が出土している。鏡窪遺跡の東側の神林開田からは縄文中期、平安時代の土器片が採集されている。鋸川を渡る近くには遺跡がなく、奈良井川寄りになると奈良・平安時代の遺跡が多くなる。このようにして見ると、奈良・平安時代には平坦地にかなりの集落が営まれていたことが窺える。



調査地西側部分の竪穴住居址群



発掘調査の範囲(1:4000 上方が北)

## 調査の成果

今回の調査では約7500㎡の範囲内に、総数130棟に及び竪穴住居址を主体として掘立柱建物址・土塙・溝址が発見され、平安時代の大規模な集落址であることが確認された。各遺構からは多量の土器・陶器類のほか鉄器・銅製品・石器・石製品など多量の遺物が出土している。発見された各種の遺構および遺物の概要は下表のとおりである。出土遺物から推定する各遺構の年代は、すべて9世紀中頃から10世紀中頃のほぼ1世紀間に収めることができる。

特記すべき調査所見は、遺構については、第一に大形の竪穴住居址の主柱穴と補助柱穴の配置に好例が見られること(3・4頁参照)、第二に集落全体では住居と溝との関係、あるいは住居間の配列に一定の傾向が窺えること(5・6頁参照)が挙げられる。遺物では、銅製印鑑や襦袢痕のある佐波理碗の出土(9頁参照)、緑釉陶器の多いこと(7・8頁参照)が注目に値する。特に緑釉陶器は図示できないものまで含めると総数で150点余となり、同時期の他の遺跡に比べて際立つた違いを見ている。また墨書土器で同一の文字「王」を記したものが、多くの竪穴住居址から出土していることも見逃せない。

以上のような内容の今回の調査は、幾多の貴重な遺物の出土や竪穴住居・集落の構造に迫るなどの考古学上の成果に加え、古代史的にも松本平南西部の開発や更には筑摩郡・松本平の発展を探るための良好な資料をもたらす意義の大きいものであった。

現在、遺物についてはごく一部の整理が終了のみで全体像をつかむには程遠いが、ここまでの調査結果から推測すると、この平安時代の集落は並外れた数の緑釉陶器や銅製品を保有する有力な集団が約1世紀という短い期間内に、大規模かつ計画的に開発・入植し、そして去っていったものであったと言える。集落の性格については、竪穴住居址の数に比べて掘立柱建物址が少なく規模も小さい点や、今のところ古瓦・陶瓦といった遺物が皆無であることを考え合わせると官衙やその周辺ではないようであり、むしろ荘園的なものを想定したほうが良いのかもしれない。

## 遺構

竪穴住居址	130棟
掘立柱建物址	10棟
溝 址	5本
土 塙	7基
ピット	約100基

## 遺物

土器・陶器	土師器・須恵器・灰釉陶器多数、緑釉陶器約150点(小片を含む)、越州窯系青磁1点 ほとんどが竪穴住居址からの出土
鉄器・鉄製品	鉞、鎌、刀子、斧、釘、紡錘車、麻皮剝具、その他器形の不明なもの等50点余、鉄片約100点
石器・石製品	帯飾り(巡方)、砥石
銅 製 品	帯飾り5点(巡方、蛇尾?)、古銭2点(1点は富寿神宝)、印鑑(方一寸の老鑑印)、八棱鏡、佐波理碗、佐波理碗を除き竪穴住居址からの出土



### 第55号住居址

1区中央部に位置する大型の住居。僅かに歪む方形を呈し、南北6.4m、東西7.1mの規模をもつ。壁はいずれも40cm前後の高さを測り、床は地山のロームを固くした堅牢なものになっている。4つの深い主柱穴と壁際に4本配される補助柱穴をもつ。覆土中から床面に掛けて土器が多く出土し、土師器の坏だけでも一括品が数10個体に及ぶ。これには「王」の書畫が多数見られる。また灰釉陶器や一括品を含む10数点の緑釉陶器が出土している。



### 第110号住居址

2区南側に位置する大型の住居。隅丸方形のプランを呈し、南北5.6m、東西6.8mの規模をもつ。壁高は40cmから60cmと高く、床は粘床でロームを固くした堅牢なものになっている。4つの深い主柱穴のほか、壁際には礎石らしいものも見られる。覆土から床面に掛けて、土師器、須恵器が多数出土。土師器の坏、埴輪を主とするが須恵器の把手付きの巻、銅製の帯金具2点、石製の帯釦り1点などが特記すべき出土遺物である。



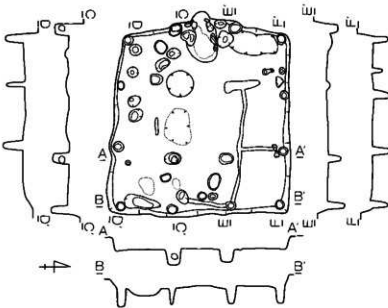
### 第22号住居址

1区北端東側に位置する中型住居。隅丸長方形のプランを呈し、規模は南北5.2m、東西4.4m。第23号住居址に切られる。壁高は一律に40cm前後を測り床は程よく堅くしまりのよいロームからなる。土師器を中心とした土器が少量出土したが、とりわけ注目すべきことは、壁際より「長良私印」と読める銅製の印鑑が発見された事である。本址は、規模、構造、他の出土遺物等から見て平均的な住居址であるにもガガかわらず、このような貴重な遺物が出たことは不思議な事である。



### 掘立柱建物址

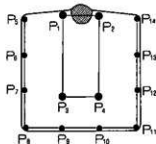
1区中央部、北部、南部に1棟づつ、2区溝4南部には7棟集中して存在した。本調査区域に総数で10棟みられる。建物の平面形は方形ないしやや桁行のある長方形で、柱の配置は大半が桁・梁同数で2周から1周の側柱式であり、総柱式は2軒みられるのみである。主軸方向はほとんどが南北を指し、わずかに建物址9が東にふれる程度である。写真は建物址8(手前)、5(奥)。



第55号住居址実測図(1:120)

### 第55号住居址の構造

カマド周囲のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>および床中央のP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>を主柱穴とし、P<sub>5</sub>～P<sub>14</sub>まで実際に4つづつ補助柱穴がならぶ。他のピットはいずれも浅く、柱穴とみなし難い。P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>より僅かに内側のピットは入口部施設に對する可能性がある。カマドは西壁中央にあり、やや張り出す。床は全般的に堅いが、特に主柱穴に囲まれる一帯が非常に堅固になっている。床に掘られた小溝は、間仕切り施設または板張り床の存在を暗示させる。カマド内の他に床上4か所に焼土がある。

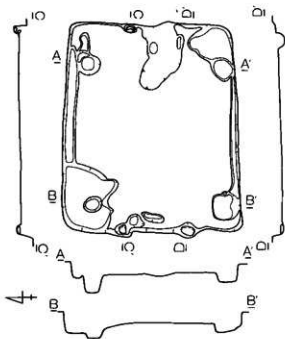


柱穴配置模式図

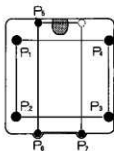
- 太い柱穴
- 細い柱穴
- カマドの範囲

### 第110号住居址の構造

大形のピットP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が配置からみて主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が壁下であるのに対しP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は若干内側へずれる。この他にカマドの脇とその対辺にやや壁外へ張り出すように、内部に平らな石をもつ浅いピット(P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>)があり、底板(礎石)を有す柱穴である可能性がある。焼溝は北・南壁下下のみみられる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>間内側の小溝は入口部施設であろうか。本址は褐色土中に掘り込まれているため、床はロームを貼って堅固に叩き締めている。北西と南東の隅には浅く大きな窪みがある。



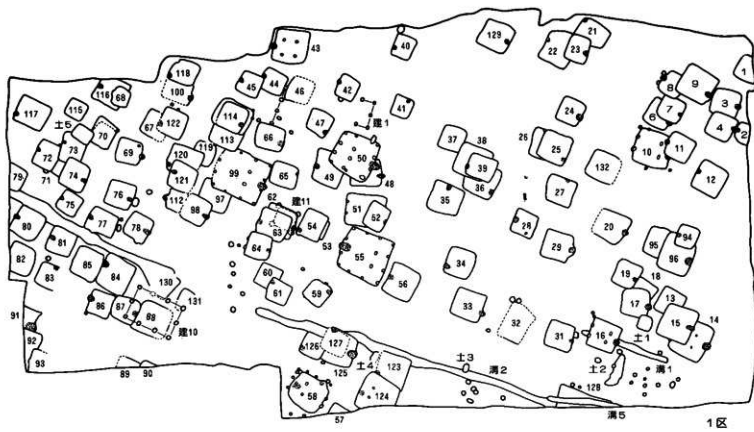
第110号住居址実測図(1:120)



柱穴配置模式図

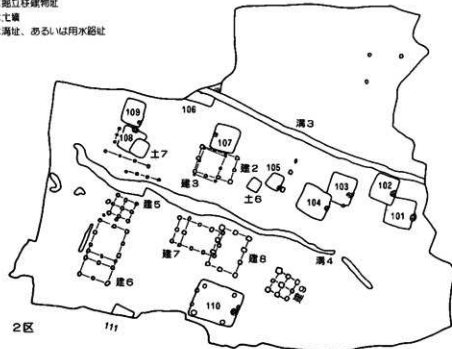
- 太い柱穴
- 礎石状の石
- カマドの範囲

松本市周辺の遺跡では、奈良時代から平安時代にかけて壁穴住居の柱穴がなくなる現象が顕著である。本遺跡においても柱穴が存在する住居址は後述のとおり130棟のうち8棟のみで、ここに示した2例はむしろ特異なものといえる。その柱穴配置も、4本の主柱穴が住居址コーナー部から等距離の床上に方形配列をなす、古墳時代からの伝統的な型は第43号住居址のみで、他のほとんどは第55号住居址の様な、カマドの高礎ないしはその対辺の壁際と床中央部にあつて長方形の配列をなすものとなる。第10・50号住居址の様に、著しいものでは壁際柱穴が外部へ張り出す。この現象の背景については、住居内から可能な短り柱穴(節ち柱)を少なくする願図があつたと考えられるが、比較的大形の住居にのみ柱穴が残るとはかりもいえず、上層構造の変化も考慮される。



1区

数字のみは竪穴住居址  
 『竪穴住居址群』  
 『土』土7  
 『溝』溝址、あるいは用水路址



2区

## 遺構と集落

遺構は調査地のほぼ全域に広がっているが、東西方向に調査地を貫流する溝2~4により区画され、溝3以北に竪穴住居址が、また以南には竪穴住居址が集中している。

竪穴住居址はいずれも竪穴方形の平面形で、規模は一辺約2~7mと格差が著しい。どの住居も東西方向に主軸をそそえ、竪はほとんどが西または東壁に設けられており、北壁のものが少数見られるが南壁にある例は皆無である。柱穴をもつ住居は、第10・16・43・50・55・58・99・110号の8軒にすぎない。このなかで平面規模の突出して大きい第50・55・99号の3軒は各壁面に4本ずつの補助柱穴が配される。

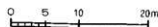
10棟発見された竪穴住居址は、竪穴住居址と同様に主軸は東西方向を指す。第6・9号が2×2間の輪柱式、第2・3・6・7・8・10号が柱柱式で桁行3間、梁行2間のものが多い。第6・7号は片側の梁行に平行して1列ないしは2列の柱列をもつ。

5本の溝址はいずれも正確に東西を示しており、人為的な遺構であることがわかる。溝2・4の下層は砂性が強く用水路と推定される。溝2が調査地西部で一旦とぎれるのは後世の削平によるもので、本来は通じていたのであろう。

集落全体で見ると、溝址を境にして竪穴住居址群と竪穴住居址群が分かれることは先述のとおりだが、さらに竪穴住居址群の配置を見ると、調査地中央部には不規則に点在または集中・重複するのに対し、西部は僅かな間隔をもちながら隣接するように並んでいる。そしてこの双方の中間には第50・55・99号の3軒の大形の住居が存在し、性格の異なる東西の住居址群を促して本集落の中心をなす観がある。ただし土器の分析によると、竪穴住居址群の発地は、時期的にはおよそ3段階に段階づけられる。このため、断面で見ると同時期に存在した住居は総数の1/3以下で、また中央の3軒の大形住居址も、同時併存ではなく1軒の3段階の変遷と捉える方が妥当であろう。溝2も重複する住居址にはすべて切られており、古い時期の住居址群に伴うものと考えられる。

集落は今回の調査地の範囲より広がっていることは明らかで、遺構の分布密度や溝址のあり方からみて主に西方および東方へ延びていくものと推定される。

溝3の北第一帯に遺構の空白地があるのは、溝2の中断部分と同様に後世の削平によるものである。



### 土器・陶器

各種の遺構内から多量に出土したが、代表的な器種に限って説明したい。

**土師器** 出土土器の主体をなす。台のない平(1・7)、台付きの碗(2・3・6)、台のない皿(4)、台付きの皿(5)、小形の壺(8)、胴の長い壺(9; 下部欠損)などがある。1～3の内面は炭素を吸着させて黒色にしてある。

**須恵器** 古い時期の遺構から出土するが量は少ない。台のない平(11・12)がほとんどで、蓋(10)は非常に珍しい。まだ小～大形の壺(13)がある。

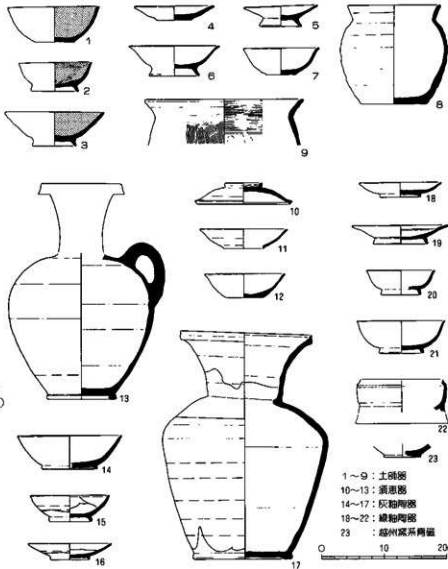
**灰釉陶器** 土師器にともなって出土するが量はあまり多くない。食器類が中心で、碗(14・15)、皿(16)がある。各種の瓶類も少数ではあるが見られる(17: 大形の広口瓶)。

**緑釉陶器** 出土量は総数で約150片と他の種別比べてきわめて少ないが、松本市周辺の同時期の遺跡のなかでは驚くべき多さである。器形の復元できるものもかなりあり、ここでは皿(18)、段皿(19)、大小の碗(20・21)、合子(22)の5点を図示した。

**青磁** 越州窯系の青磁1点のみ出土している(23)。蛇の目高台をもつ碗の破片である。

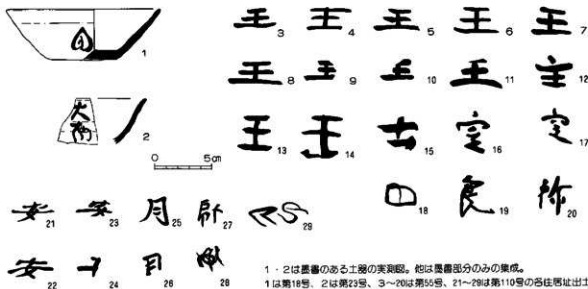
### 墨書土器

土師器や須恵器、まれに灰釉陶器に墨で字や記号が描かれている。第55号住居址では王、第110号住居址では安の字が多い。特に王は30軒近い住居址から出土している。



1～9: 土師器  
10～13: 須恵器  
14～17: 灰釉陶器  
18～22: 緑釉陶器  
23: 越州窯系青磁

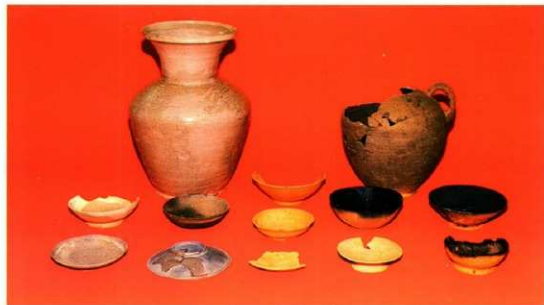
0 10 20cm



1・2は墨書のある土器の実測図。他は墨書部分のみの集成。

1は第18号、2は第23号、3～20は第55号、21～29は第110号の各住居址出土。





左列列：灰釉陶器類・皿  
 二列目：酒器類平・蓋  
 中列列：土器類平・杯・皿  
 右二列：土器類皿・内腹環  
 ・杯  
 後列：灰釉陶器口縁・  
 酒器茶壺



左列：緑釉陶器皿  
 後列：緑釉陶器類  
 石魂：越州窯系青磁類



各種の墨書写真



## 銅印

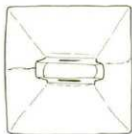
第27号住居址の北西庭際で床面よりやや上ったところから単独出土した。銅製で3.32×3.22cm、高さ2.78cm、重さは52.15gである。印面は方形で四辺にはやや市広の筋がめぐり、印文は2行で、一行に2字ずつ「長良」「私印」と読あわされている。書体は楷書風のしつかりした文字で、文字の深さは3.2mmあり、基部には朱の付着がみられる。筋は苔垢有孔で、印上面には物型の合せ目の細線が線に残っているが、文字上側は太目の線になっている。銅質は良く保存状態も良好である。材質については蛍光X線分析の結果によれば、主成分銅の量に対して錫と鉛の量が多いことが判っている。(奈良国立文化財研究所、末田正昭氏測定)

県内における大和古印は、既に重要文化財に指定されている諏訪大社下社の「養神祝印」(めがみほうりいん)(伝・大同年間宇城天皇下勅)と、明和3年(1766)に出土したという佐久の「物部猪丸」(ものべししまる)があり、今回出土の「長良私印」(ながよししいん)は3点目である。私印は奈良時代後半から使用されたと言われ、その用途・機能として、自己の権利・所有の表示、祝儀的・進符的な意味、封印、主体・権威・職務を確認するための証印などがあり、本印についても没所等に提出する文書に使用されたのではないかとと思われるが、確証はない。

「長良」については人名とみることは妥当であるとしても、それが姓と名の一字づつか、あるいは姓名のそれぞれ2文字とも考えられるが、ここでは名の2文字を示すものと考えたい。「長良」は藤原長良(摂政関白藤原基経の実父)が実在するが、長良は文徳天皇に侍した権中納言である。時代的には同一住居址内出土の遺物からみると、900中・後半に充てられるので合致するが、果してこの印が実際に本遺跡で用いられたものかについては不明である。

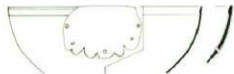
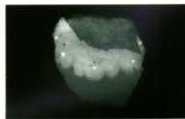
註 (1) 木内武男「印章」新編考古学講座7「有史文化(下)」雄山閣 昭和55年

(2) 奈良国立文化財研究所 名譽正昭氏表示



## 銅鏡 (佐波理碗)

第69号住居址を切るピット内より検出されたもので6片になっているが、同一個体と思われる。やや歪むが口径16.0cmを測る。器壁は1mm弱と薄く、口縁内側が僅かに厚い。外側には口縁に2本と3本の二組の線がめぐっている。底部近くと思われる破片にも同様な流線がめぐっている。市内で銅鏡を出土した遺跡は他に藤原南業・神林下神遺跡があり、南業遺跡からはほぼ完形品が出土している。これら銅鏡は仏器として使用されたものと考えられている。



銅鏡復元実測図



参考写真(南業出土品)

口縁部破片のなかには上記のように補修痕をもつ破片がある。レントゲン写真で見ると欠陥部を包囲するように銅板を表面に折り出す。その隙間を花押状に切つてもが所に径2mmほどの線であてめている。なお補修時の欠陥の穴が、2個の細い穴があとままだになっているものもある。銅鏡に補修痕を認め例としては奈良朝の藤原寺出土のものがある。

## 八稜鏡

第59号住居址より出土したもので、火熱で一部が溶けているが、径8.6cm、厚さ1.5mm、重量54.9gである。縁は蒲鉾式の細縁で、細縁の単箇がめぐり、円錐鋸の穴には鉛が残っている。文様は瑞花双鳥文らしい。



## 銭貨

富寿神宝(上)は、第16号住居址の床面より出土した。皇朝十二銭の五番目で、初鑄は818年である。外縁の約1/4を欠き酸化が著しい。県内では数例の出土が知られている。他の1点は第56号住居址より出土した。銭種は不明である。



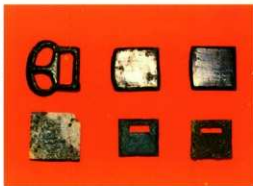
## 帯飾り(鏡)

銅製と石製がある。銅製は止め金具(錠具)は第43号住居址、方形の3cmのものは第16、126号住居址、巡方の3.7×3.5cm大のもの2個と石製のものは第110号住居址から出土している。特に巡方の一つは裏金を6本の留金でかためてあり、他の一つは留金が折れた後、3カ所に穴をあけて留め直したものである。石製のものは大理石製で3.9×3.7cm大で、表面四隅に2個一対の穴をあけ、そこに銅線を通してベルトに留めたもので、針金が残っている。

錠具(カこ:止め留具)



帯金具着装状態模式図



## 鉄器

今回の調査で出土した鉄製品のうち種別が判ったものには釘・刀子・鉄鍬・鎌・紡錘車・皮はぎ・鉄斧がある。釘・刀子の類が多い。釘はほとんどが少片だが、丸釘・角釘が認められた。鉄鍬は平根鍬・雁股鍬の2種がある。鎌は破片のみの出土であるが、地が薄く、端部は折り返しがかされている。写真は、紡錘車(上)、鉄斧(左)、鉄鍬(中)、麻皮剝具(右)。

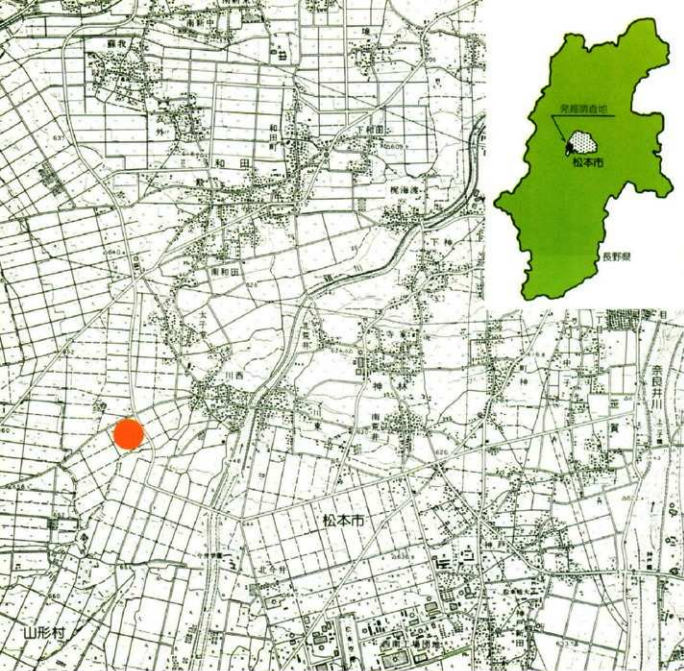


## あとがき

昭和62年度に行った本遺跡調査では130軒におよぶ住居址と、おびただしい遺物の出土をみた。その中には既述のように、銅鏡・銅鏡・鈴帯・八稜鏡・皇朝十二銭等の青銅製品や、多量の緑釉陶器・黒土器等が含まれており、松本市周辺の同期の遺跡と比べて卓越した遺跡であると言える。

この三周刊川左岸遺跡は、過去の構造改善事業の際にも多量の遺構や遺物が検出されており、更に今回の調査結果を見るに及んで本遺跡の規模の大きさを感じるものである。(昭和63年度調査でも140軒余の住居址等を検出した。)このことは荘園制下における村落の様相解明に大きな示唆を与えるものである。

調査に当っては市商工部をはじめ関係機関のご理解・ご協力があった。記して謝意を表する。なお本報告書は遺跡・遺物の重要性に鑑み、早期公表との見地から概報として扱った。なお、遺物・図書類は松本市立考古博物館に保管してあるので、ご活用願いたい。



免掘調査地



遺跡名 三間沢川左岸遺跡  
 遺跡台帳No 松本市64-326  
 (長野県市町村別遺跡一覧表)  
 松本市273 (長野県史番号)  
 調査地 長野県松本市大字和田字南西原740番地  
 調査期間 昭和62年5月26日から7月25日  
 調査原因 臨空工業団地造成に伴う緊急発掘調査  
 調査主体 松本市教育委員会

### 三間沢川左岸遺跡(1)

平安時代集落址の緊急発掘調査概報  
 昭和63年10月31日発行

発行 松本市教育委員会  
 〒390 松本市丸の内3-7  
 TEL 0263(34)3000  
 印刷 中信凸版印刷株式会社